様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０５５３

研究課題名（和文）コーパスを活用した英語シノニム・語法研究

研究課題名（英文）Studies on English Synonyms and Usage: A Corpus-Based and Corpus-Driven Approach

研究代表者
井上　永幸（Inoue, Nagayuki）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：１０２３２５４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は2013年度から2017年度までの5年間に，日本人英語学習者が誤り易いあるいは迷いやすい12項目の英語シノニム・語法について，コーパスを使って母語話者が無意識のうちに行っている使い分けを分析し，英米の文献や参考書で取り上げられたことのない表現についても，日本人英語学習者がそれらを使用する場合にどういった点に注意すればよいかをふまえて，統語的特徴や意味的特徴を記述しようとするものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to, during the five years of 2013 to 2017, analyze 12 items of English synonyms and usage Japanese students of English often make mistakes in and are puzzled about, and to describe their syntactic and semantic features with a full understanding of the difficulties frequently encountered by Japanese students of English, using corpora with which even non-native speakers of English are able to probe into English produced by native speakers of English in their daily life and to obtain the opportunity of studying English expressions that are not provided in literature or references.

研究分野：人文学

キーワード：英語シノニム　英語類義語　英語語法研究　英語コーパス言語学　英語辞書学

**１．研究開始当初の背景**

従来から語法研究の分野でシノニム研究が行われることがあったが，英語の非母語話者にとって立ちはだかる壁も大きい。その現実を如実に表わすものが 2 ヶ国語辞典であろう。大きく発展を遂げてきた日本の英和辞典であるが，シノニム記述に関しては，どの英和辞典を引いても似たような説明しか見られないといった経験をすることも多い。このような状況をもたらした原因は，シノニム記述や語法記述を海外の ESL/EFL 辞典やシノニム・語法辞典の記述に頼ってきたからに他ならない。うがった見方をすれば，そのような海外の資料に当該表現の記述がなければ，シノニムや語法の記述がおぼつかない状況であったとも言える。ましてや日本語を母語とする英語学習者の立場に立った説明記述など期待するべくもない。

申請者は幸運にも 1987 年に刊行された『ジーニアス英和辞典』（大修館書店）以来，『英語基本形容詞・副詞辞典』（研究社出版，1989），『ニューセンチュリー和英辞典』（三省堂，1991），『ニューセンチュリー和英辞典』第 2 版（三省堂，1996），『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店，2001），『ウィズダム英和辞典』（三省堂，2003）〔「英語コーパス学会賞」（2003）を受賞〕，『ウィズダム英和辞典』第 2 版（三省堂，2007），『ウィズダム英和辞典』第 3 版（三省堂，2013）などの各種英語辞典の執筆や編集，加えて，『英語コーパス言語学』（研究社出版，1998），*English Corpora under Japanese Eyes* (Rodopi, 2004)，『英語コーパス言語学 ―基礎と実践―』改訂新版（研究社，2005），『コーパスと英語教育の接点』（松柏社，2008），『英語辞書をつくる ―編集・調査・研究の立場から―』（大修館書店，2016）などのコーパス言語学や英語辞書学に関する概説書や論文集の編集・執筆に関わることができた。また，1993 年 4 月から 1994 年 1 月にかけては，若手在外研究員（決定番号 5-若-73）としてバーミンガム大学（連合王国）とノルウェー人文科学電算処理センター（ノルウェー王国）においてコーパス言語学に関する研究を行う機会を得，2004 年度（平成 16 年度）から 2007 年度（平成 19 年度）には「コーパスに基づく英語シノニム・語法研究」というテーマで科学研究費補助金（基盤研究（C）；課題番号 16520298）を得ることができた。「コーパスに基づく」という文言は英語の corpus-based（コーパス基盤的な）を取り入れたものであるが，先行研究の内容をコーパスで検証するという立場を表したものであった。さらに，2008 年度（平成 20 年度）から 2012 年度（平成 24 年度）には「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究」というテーマで科学研究費補助金（基盤研究（C）；課題番号 20520442）を得る機会に恵まれたが，「コーパスを活用した」という文言は，2004 年から 2007 年の科研テーマの corpus-based に，検索したコーパスの内容に啓発されて新たな言語事実や法則性を発見する立場を表す英語の corpus-driven（コーパス駆動的な）の意を合わせもたせる意図によるものであった。このように，申請者は近年一貫してコーパスを活用したシノニム研究及び語法研究を行ってきたところであるが，本申請は，分析対象となるコーパスの範囲を広げ，より広い視野からシノニム・語法研究を引き続き行ってゆこうとするものである。

**２．研究の目的**

本申請は，平成 25 年度（2013 年度）から平成 29 年度（2017 年度）までの 5 年間に，日本人英語学習者が誤りやすい 12 項目の英語シノニム・語法について，統語的特徴や意味的特徴を種々のコーパスを使って分析し，日本人英語学習者がそれらを使用する場合にどういった点に注意すればよいかをふまえて，それを記述しようとするものである。

シノニム・語法研究にコーパスを活用する利点は，以下のように集約できる。まず，英米の文献にない当該表現についても分析記述できる可能性が広がり，母語話者による先行研究に負うところの多い現状を打破できる。また，少人数のインフォーマント調査では避けることのできない個人差を吸収できる。さらに，最も重要なのは，母語話者が無意識のうちに行っている表現の使い分けを分析対象とすることができる点である。コーパスを適切に運用すれば，母語話者ゆえに見過ごされていた現象や言語事実を非母語話者の立場から客観的に明らかにすることが可能になる。

特に，コーパスの検索・表示を行うコンコーダンスソフトを使えば，当該表現の典型的特徴を視覚的に捉えやすい形で得ることができるし，頻度・*t*-score・MI-score といった統計値を活用すれば，従来の感覚や直観に頼った研究方法では得られなかった科学的な裏付けを援用しながら研究分析を進めることができる。とりわけ，複数のシノニムについて，その典型性の差異を具体的数値で概観できるようになる点は，その情報的価値だけではなく，研究効率を大いに高めてくれる。

前節でも言及したが，コーパスを研究に活用する場合，「コーパス基盤的」立場と「コーパス駆動的」立場がある。前者の立場は，特定の仮説について，その仮説が正しいかどうかをコーパスを用いて検証してゆくもので，例えば Biber et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English* (Pearson Education) は，Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman) の文法的枠組みに従い，コーパスを使って現代英語を検証したものである。後者の立場は，コーパスデータに触発されて，通常の言語直観による内省のみでは発掘することの困難な新たな言語事実を発見し，既成の理論にとらわれず一般化を試みるもので，Hunston, S. and G. Francis (2000) *Pattern Grammar*: *A Corpus-Driven Approach to*

*the Lexical Grammar of English* (John Benjamin), Tognini-Bonelli, E. (2001) *Corpus Linguistics at Work* (John Benjamins), Stubbs, M. (1993) "British Traditions in Text Analysis: From Firth to Sinclair," in Baker, M., G. Francis and E. Tognini-Bonelli (eds.) *Text and Technology*: *In Honour of John Sinclair* (John Benjamins, pp. 1–33), 井上永幸（1995）「話し言葉における many について（1）―The Bank of English を使った分析―」『英語教育と英語研究』第 12 号（島根大学教育学部，pp. 57–67），井上永幸（1996）「話し言葉における many について（2）―The Bank of English を使った分析―」『英語教育と英語研究』第 13 号（島根大学教育学部，pp. 43–63），井上永幸（1997）「英語辞書編集とコーパスの可能性 ―文法・語法の記述―」『英語教育と英語研究』第 14 号（島根大学教育学部，pp. 43–61），井上永幸（1998）「学習英和辞典における語法情報とコロケーション情報 ―コーパスで何ができるか―」『英語教育と英語研究』第 15 号（島根大学教育学部，pp. 71–86），井上永幸（1998）「コーパスと統計資料 ―新しい辞書編集へ向けて―」『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』（大修館書店，pp. 20–28），井上永幸（1999）「コーパスを使った語法研究と辞書編集」『英語表現研究』第 16 号（日本英語表現学会，pp. 50–60），井上永幸（2001）「コーパスに基づくシノニム研究 ―happen と take place の場合―」『英語語法文法研究』第 8 号（英語語法文法学会，pp. 37–53），井上永幸（2010a）「辞書編集におけるコーパス活用」『英語語法文法研究』第 17 号（英語語法文法学会，pp. 5–22），井上永幸（2010b）「コーパスを活用した英語シノニム・語法研究 ―quiet と silent―」『人間科学研究』第 5 巻（広島大学大学院総合科学研究科紀要 I，pp. 1–23）などの他，別に挙げる島田・井上（2013），山本・井上（2015），多田羅・井上（2015），井上（2016）などはその例である〔p. 5 を参照〕。

本研究は，コーパス基盤的な立場とコーパス駆動的立場の両者をふまえたものであるが，国内外において，特定の研究方法論に基づいて統一的に英語シノニム・語法研究を行った例はなく，この点において申請者は 1995 年以来，一貫してコーパスの各種統計値を使った語法研究及びシノニム研究を行って，英語コーパス学会を始め，英語語法文法学会，英語表現学会，日本英語学会などでもその成果を発表し評価されている。日本語母語話者の観点から，バランスを考慮して構築されたコーパスを適切に援用することによって，日本人英語学習者が当該のシノニム・語法を習得するにはどういった情報が必要となるのかを客観的に分析することができるようになるだけでなく，英語母語話者が見過ごしてきた種々の現象にも光を当てることが可能となるのである。

## ３．研究の方法

シノニム・語法研究をする際にどのような語句の組を設定するかは，研究そのものの質的な価値に関わるだけでなく，研究成果の英語教育における貢献度にも大きく関わってくる。従来のように研究の対象となる語句の組を恣意的に選択するのではなく，できるだけ現実のコミュニケーションにおける有用度や日本語を母語とする英語学習者（以下，学習者）が英語を学ぶ際の重要度を考慮して選ぶこととする。現実のコミュニケーションでの有用度を測るため，各種コーパスにおける頻度情報を活用し，高頻度でかつ学習者が誤り易かったり使いこなすのが難しい語句・表現のうち，従来その分析が十分でなかったものを中心に 12 組のシノニム・語法を選択する。

以上のような過程を経た後，当該項目について先行研究の調査を行う。幸運にも過去の論文に取り上げられたことのある語句の場合は，この段階である程度の情報が集まるが，論文で取り上げられたことのない語句の場合は，母語話者による 1 言語辞典が貴重な資料となる。とりわけ，EFL/ESL 向けの辞典は母語話者向けのものそれよりも記述が詳しく参考になる。もっとも，母語話者による辞典は母語話者の立場で書かれているので，非母語話者にとっては重要な情報でも母語話者にとって当然のことは説明記述が抜け落ちていることも多い。そのような中で最も非母語話者が当惑させられるのが，単なる言い換えによる定義記述である。たとえば，happen の定義として take place が与えられ，take place の定義で happen が用いられるといった方法である。日本の英和辞典や類義語辞典の編集はその記述の多くを英国や米国の EFL/ESL 辞典に依存してきたため，それらの辞典にシノニムに関する情報がない場合は，日本の英和辞典や類義語辞典でも十分な説明を得るのは難しい。「研究目的」でも述べたように，そのような語句について，学習者が受信や発信，特に発信の際に必要な情報を記述してゆくことを本研究では意図している。

先行研究の調査の過程で研究対象語句の問題点が明らかになってくる。Bank of English や Linguistic Data Consortium（LDC）から提供されている各種コーパスなどから抽出したデータを，TXTANA 等のコンコーダンスソフトを使って分析し，先行研究の内容を検証してゆくことになる。コーパスを使えば母語話者の直観による言語データを，非母語話者であっても居ながらにして分析対象とすることができる。インフォーマントテスティングにのみ頼る方法と違って，個人差を吸収することができるし，アンケート調査の際に生ずる質問の仕方による不都合を避けることもできる。アンケートのように質問を受けて様々な判断の後に出てきた結果ではなく，自然な状況で無意識のうちに行われた言語活動を分析対象とすることができることは大きな魅力である。

一方，コーパスがあるとは言え，キーワードの検索結果が数百を超える場合は，もはや人間の目だけに頼った分析は難しい。そのような場面で頼りになるのが各種統計値である。どのような語句が頻度が高く，どのような語句と語句の連結度が高く典型的なのかなど，直観や日常的な経験にのみ頼るのではなく，客観的で科学的なデータに基づいて検証できる。MI-score は，予想以上に共起した語に反応する。具体的には，特定の名詞を修飾する典型的形容詞，特定の名詞の述語となる動詞，特定の形容詞・動詞・前置詞を修飾する典型的副詞，特定の前置詞と連語する名詞，慣用句，ことわざ，複合語，専門用語など比較的独特の言い回しを構成する語がリストの上位に現われることになる。ただし，MI-score のリストの上位にランクされていても，必ずしもキーワードとなる語の典型的な用法ではなく，検索対象となったコーパスまたはそのコーパス内の特定のサンプルに特有の連語であることも多い。一方，*t*-score は特定の 2 語の共起頻度に焦点をあてるため，キーワードの前後に頻繁に生起する機能的・文法的特性をもった語に目が向けられることになる。具体的には，特定の名詞と共起する限定詞・前置詞・接続詞，特定の形容詞と共起する前置詞・接続詞・不定詞，特定の動詞と共起する前置詞・接続詞・不変化詞・人称代名詞，特定の動詞分詞形・形容詞の前で用いられる be 動詞，常套句や使い古されてしまった比喩，決まり文句などを構成する語などが上位にランクされることが多い。

コーパスを分析してゆくと，母語話者が行った説明記述でも実際の言語活動で行われている事実と異なっているということを経験することがある。たとえば，母語話者による複数の ESL/EFL 辞典で，take place は「計画された事などが起こる」場合に用いる旨が定義で示されているが，下に示すように，反例も散見される。

But that, of course, is not what is happening. The ocean is a gigantic chemical retort, in which thousands of complex and sometimes ***unexpected*** chemical reactions are ***taking place*** on a scale which defies comprehension. The impact of sunlight on sea water turns some of it into hydrogen peroxide: the bleaching agent which turns hair `Marilyn Monroe" blonde.―Bank of English, Corpus: brbooks/ UK. Text: BB-Lm90-744.〔斜体太字は申請者〕

母語話者による一般化を絶対視するのではなく，第三者の立場で冷静にデータに向き合うことが必要であろう。これにより，一般化の際に問題にすべきなのは「計画された事などが起こる」ということではないことがわかってくる。上で言及した統計値を活用してコーパスを再び眺めてゆくと，take place が生起する環境では高い確信度を表す助動詞や表現が特徴的に現れていることから，take place には「計画性」ではなく「発話者の確信度の強さ」という性質が関係していることが浮かび上がってくる。happen と take place の両者が近接する文脈に現れる用例なども検索して，happen は what や something などを始めとする -thing などで終わる不定代名詞と相性がよく，内容は漠然としたままで，ある出来事の生起の有無に焦点を当てた表現で好まれることが考察される。このような方法で，前もって設定したシノニム・語法に関する 12 項目について分析を行ってゆく。

## ４．研究成果

以下のような 12 項目について，研究・考察した。辞書や参考書における今後の対応が望まれる。

（1）earlier/before

高頻度で単なる比較級以上の独自の語法をもつに至った earlier について，before との違いを示しながら，主に副詞用法のシノニム記述を検証した。earlier this year のように後に期間を表す表現を伴い，その期間の初期にある出来事が起こること，a week later のように期間を表す表現の後において，ある時点を基準にしてそれより一定期間前に出来事が起こることを示すが，主に過去のある時点を基準とする場合に好まれること，as I said earlier のように単独で過去の一定時点を指すことがあること，現在までの過程を意識して現在完了形と用いることが可能な before と違って出来事の前後関係に焦点を当てる earlier は経験を表す現在完了形とは相性が悪いことなどを示した。

（2）for / to

「…にとって」の意で日本人英語学習者が混同しやすい for と to について，直前に生起する形容詞･名詞の観点からその差異について検証した。easy や good など適性を表す形容詞とは for が，important や clear など判断・評価の主体や動作・影響の及ぶ対象を表す形容詞や名詞とは to が，natural や normal といった相対的な評価基準を引き合いに出しながら話者の判断を表す形容詞では for と for のいずれも用いられる傾向があることを示した。

（3）主格補語をとる動詞 fall と副詞との関係

主格補語をとる動詞 fall の振る舞いについて，申請者の過去の研究から明らかになった補語の位置に生起する形容詞や名詞の観点から他の主格補語をとる動詞との違いについて分析する様子を紹介したうえで，共起する副詞に注目しながら，主格補語に現れる形容詞や名詞から導き出した fall の性質と矛盾がないことを示した。また，共起する副詞の分析により，他の同類の主格補語をとる動詞との比較分析の可能性も示した。

（4）Thank you so much. の男女使用頻度

副詞 so が女性に多用されることは，Stoffel (1901) や Lakoff (1975) によっても指摘されているが，ここでは “Thank you very much.” に対する “Thank you so much.” の頻度について，Corpus of American Soap Operas を年号

別に分類・検証し，“Thank you so much.” が女性に好まれる傾向を統計的に示した。

（5）everything と from

everything は後ろに from . . . to . . . を従えて，He did everything from producing ads to occasionally selling tickets. のように用いられることがある。この from . . . to . . . は範囲を表しているが，前には，everything, everywhere, everyone, everybody, anything, anywhere, anyone, anybody, all (. . .)，every . . . ，any (. . .) など包括性を表す語のほか，range, vary, spread, extend など多様性･拡張性を表す動詞，さらには price, period, rate, number, issue, adults, age(d) といった数値の拡張性を暗示する名詞を伴いやすいことを検証した。

（6）同格の that

名詞の後に生起する同格の that について，コーパスを分析し，fact, idea, possibility, notion, impression, feeling などのように that 節とともに自由に名詞節として生起しうる種類の名詞と，in the sense that . . . , to the extent that . . . , in the hope that . . . , in the belief that . . . , in [with] the knowledge that . . . , on the ground(s) that . . . などのように特定の慣用表現でのみ用いられる句として現れる名詞とに分類できることを示した。

（7）enough as it is

副詞記述において，英米の文献にも扱われていないような慣用的コロケーションをいかに発掘・記述してゆくかという観点から，程度の甚だしさを皮肉っぽく伝える際に用いられる慣用句 enough as it is（今のままでもいい加減…）を取り上げ，通例否定的な内容の形容詞の後で用いられることを示した。

（8）deny と副詞

動詞 deny と共起する副詞に関して考察し，strongly, vehemently, categorically, strenuously, consistently, flatly, vigorously, angrily, emphatically, hotly, adamantly, fiercely, steadfastly, furiously などの様態副詞の他，repeatedly, initially, routinely といった時間の流れに関わる副詞，さらには，brilliantly, unfairly, improperly, ungratefully, unjustly, unlawfully, wrongfully, unconstitutionally といった，deny という動作に対する話者の評価を表す副詞と連想度が高いことが示された。話者の評価を表す副詞は，様態を表す副詞と較べれば頻度はそれほど高くないためともすると見過ごされ勝ちであるが，MI-score を適切に用いることでこのような結果が示されたことは意義深い。

（9）wildly

副詞記述に際して選択制限表記を検討する際の一例として wildly を取り上げ，fluctuate, flail, veer, spin, cheer, applaud, exaggerate, swing, wave, stare, dance, laugh, celebrate などのような動作を暗示する動詞や，popular や enthusiastic といった盛況さを暗示する形容詞のみでなく，differ や vary といった状態を表す動詞や，inaccurate, optimistic, inconsistent, imaginative, successful, inappropriate, different といった形容詞と結びついて状況の甚だしさを表す際にも用いられることを示し，日本語の「ワイルド」からは想像のしがたい意味的連想を発揮するコロケーション構成を明示する事例で MI-score による効率的な分析が有効であることを示した。

（10）離接詞＋enough

離接詞の後に添える enough について，共起する副詞を *t*-score が高く大文字で始まる副詞に注目して検証を試みた。Sure, Fair, Oddly, Funnily, Strangely, Interestingly, Curiously, Naturally, Appropriately, Ironically, Amazingly, Surprisingly など，後に続く内容についての話者の評価を表す副詞がリスト上位に来る。一般に enough は省略可能なことが多いものの，Sure や Funnily では，enough を省略しない形の方が普通であることを示した。

（11）very much

very much と共起する動詞について *t*-score を基に分析し考察した。否定文・疑問文・条件文だけでなく，かたい文脈では，doubt, regret, depend など非断定的な動詞だけでなく，like, hope, want, look forward to . . . , appreciate, enjoy, welcome など肯定的な評価を表す動詞では，肯定文で(very) much の直後でも用いられること，もともと強意的な love, adore, treasure などの動詞と very much を用いるのは避けるべきとされるが，くだけた文脈ではしばしば用いられることなどを検証した。

（12）choose / select

シノニム関係にある choose と select を，共起する副詞に注目してその違いを明らかにする過程を検証した。choose では wisely, randomly, arbitrarily, carefully, democratically, consciously, judiciously, purposely, deliberately, freely, specially, unconsciously, unanimously, overwhelmingly, overwhelmingly, actively, accordingly, specifically, intentionally, individually, personally, automatically〔以上，MI-score 順〕などが select のリスト同様，上位に来るが，主語の意思を反映した selectively, voluntarily, willingly などの副詞は choose に特徴的なものである。一方，select では，randomly, specially, arbitrarily, carefully, judiciously, democratically, purposely, wisely, unanimously, individually, personally, unconsciously, intentionally, consciously, automatically, deliberately, freely, overwhelmingly, actively, accordingly, specifically〔以上，MI-score 順〕などが choose のリスト同様，上位に来るが，その選択方法にこだわりをもつことを暗示する manually, scientifically, artfully, anonymously, unfairly といった副詞との連想度の高さを示していることを考察した。

なお，単独ではないが，島田・井上（2013）では use と utilize，山本・井上（2015）では談話辞 Absolutely / Certainly / Definitely，多田羅・井上（2015）では be capable of doing を扱った。

## ５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①井上永幸（2016)「語法研究の要：副詞 ―コーパスを活用した辞書編集の立場から―」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会編), 第 23 号，pp. 20–35.〔査読有〕
②山本五郎・井上永幸（2015）「コーパスを活用した談話辞の語法研究 ―Absolutely とその類義表現について―」『人間科学研究』（広島大学大学院総合科学研究科紀要 I）第 10 巻，pp. 25–34.〔査読有〕
③多田羅平・井上永幸（2015）「Be Capable of Doing の語法」『人間科学研究』（広島大学大学院総合科学研究科紀要 I）第 10 巻, pp. 43–57.〔査読有〕
④島田祥吾・井上永幸（2013）「英語シノニム研究 ―use と utilize―」『人間科学研究』(広島大学大学院総合科学研究科紀要Ｉ)第 8 巻, pp. 1–16.〔査読有〕

〔学会発表〕（計 10 件）
①井上永幸（2018）「学習英和辞書における副詞記述 ―『ウィズダム英和辞典』の編集にあたって―」立命館大学国際言語文化研究所（萌芽研究）・言語教育情報研究科共催（2018 年 3 月 24 日，立命館大学）.
②井上永幸・西垣浩二（2017）「コーパスの示す科学的データと学習性・商品性との両立 ―『ウィズダム英和辞典』の編集にあたって―」英語コーパス学会第 43 回大会（2017 年 9 月 30 日，関西学院大学）.
③井上永幸（2015a）「コーパスを活用した辞書編集と語義記述 ―主格補語を従える fall をめぐって―」JACET 英語辞書研究会例会（2015 年 6 月 19 日，広島大学）.
④井上永幸（2015b）「語法研究の要：副詞 ―コーパスを活用した辞書編集の立場から―」シンポジウム「副詞を巡る諸問題：語法文法，辞書記述，談話，文体」英語語法文法学会第 23 回大会（2015 年 10 月 24 日，龍谷大学）.
⑤井上永幸（2015c）「英和辞典の立場から」シンポジウム「国語辞書の見出し語の立て方 ―複合辞・造語成分などの扱いを中心に―」語彙・辞書研究会 第 48 回研究発表会（2015 年 11 月 7 日，新宿 NS ビル）.
⑥井上永幸（2014a）「コーパスを活用した語彙研究と辞書編集 ―主格補語を従える fall ―」北海道大学メディア・コミュニケーション研究院主催講演会（2014 年 2 月 18 日，北海道大学）.
⑦井上永幸（2014b）「編者に聞く辞書編集の苦労話：『ウィズダム英和辞典』」JACET 英語辞書研究会・関西英語辞書学研究会（KELC）合同シンポジウム特別企画（2014 年 5 月 31 日，愛知大学）.
⑧井上永幸（2013a）「シノニム・語法研究と辞書編集のためのコーパス活用」シンポジウム「私のコーパス活用」英語コーパス学会（2013 年 4 月 27 日，大阪大学）.
⑨井上永幸（2013b）「辞書におけるシノニム記述の歩み」，公開シンポジウム「英語シノニムと辞書記述」日本英語学会第 31 回大会（2013 年 11 月 9 日，福岡大学）.
⑩井上永幸（2013c）「シノニム記述の実態と改善案」，公開シンポジウム「英語シノニムと辞書記述」日本英語学会第 31 回大会（2013 年 11 月 9 日，福岡大学）.

〔図書〕（計 1 件）
①南出康世・赤須薫・井上永幸・投野由紀夫・山田茂 編（2016)『英語辞書をつくる ―編集・調査・研究の立場から―』大修館書店（256 pp.；分担：PART I の「『ウィズダム英和辞典』」（pp. 21–40)を執筆」）.

## ６．研究組織
(1)研究代表者
井上　永幸（INOUE NAGAYUKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：10232547

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）